マフムードのバイクの残骸。パルミラ郊外の沙漠にて。

事故現場は、沙漠の道からわずか一〇メートルそれた場所だ。あたりに散らばる人工物の破片。その数十メートル向こうには、赤い大きな物体がねじ曲がり、無造作に転がっている。破損した鉄の塊。それは、あの日マフムードが乗っていた、赤いバイクの残骸だった。

私は立ち尽くした。昨年一二月のシリアのアサド政権崩壊後、かつての満たされた暮らしを夢見て、異郷から、それぞれの故郷へと戻りつつある帰還民。しかし、彼らを待ち受けているものは何だろうか。目の前には、その答えを示すかのように事故現場が広がっていた。

シリアの故郷に帰る

小松由佳（ドキュメンタリーフォトグラファー）

アサド政権が崩壊して半年。シリアの故郷へ帰還する難民と避難民を取材するため、夫の家族が戻った古都パルミラを訪れた筆者。平和な暮らしを取り戻すべく帰郷した彼らを待ち受けていたものとは。本年度の開高健ノンフィクション賞受賞作家による最新のシリア・レポート

ダマスカスの教会

二〇二五年六月、私はシリアの首都ダマスカスの喧騒（けんそう）の渦中に立っていた。たった半年前、この国は歴史的な大転換を経験した。二〇二四年一二月八日、アサド政権が崩壊したのだ。半世紀にわたり、人々を恐怖で支配した政権の突然の終焉（しゅうえん）は、世界中に驚きをもって迎えられた。ロシアやイラン、レバノンのヒズボラからの軍事支援を受け、圧倒的な優位を保っていたかのように見えた政権が、これほどあっけなく崩壊するなど、誰が予想しただろうか。

シリアは二〇一一年以降、内戦状態に陥り、かつての人口二二四〇万人中、現在までに五〇万人以上が命を落とし、約六七〇万人が難民となり、約六八〇万人が国内で避難生活を送っていた。そうしたなかで起きた政権の崩壊は、市民に抑圧を強いた統治機構そのものの消失を意味した。そして国外の難民や国内の避難民がそれぞれの故郷に帰還し、内戦が終結に向かう可能性をも示すものだった。

アサド政権の崩壊を知ったのは、取材先のロンドンの空港だった。この歴史的瞬間に立ち会わねばならない。その思いから、シリア行きの航空券を大急ぎで買い、同行していた長男を連れたまま、日本から駆けつけてきた夫と隣国レバノンで合流。政権崩壊直後のシリアへと入ったのだった。現場で目にしたのは、抑圧からの解放に歓喜し、熱狂する人々の姿だった。さらに、一三年ぶりに祖国に立った夫ラドワンの視点を通し、私は知ったのだった。難民である当事者にとって、帰還は喜びだけではない。この国で起きてきた悲惨な現実を目の当たりにし、受け止めることに苦悩も伴うということを。

あの日から半年が経った今、シリアでは暫定政権による新しい国づくりが進められている。政権を率いるシャラア大統領は、かつてイスラム過激派組織の一員であった過去から国際社会に警戒されつつも、欧米諸国との関係改善に取り組んでいる。この五月にはトランプ米大統領との会談も行われ、経済制裁の解除が表明された。今後、国際社会からの投資や支援によって、シリアの復興が進むだろう。そうした期待を胸に、今、多くの人々が、故郷へと帰還しつつある。

シリア入国から三日目、この国が抱える課題を象徴するかのような事件が起きた。二〇二五年六月二二日、ダマスカス郊外のドゥウェイラ地区にあるギリシャ正教の教会、聖エリアス教会で、自爆事件が発生したのだ。事件は、多くの信者が集まる日曜日のミサの最中に起き、少なくとも二二人が死亡、六三人が負傷した。目撃者の証言から、武装した男性が教会に侵入し、銃を発砲した後、自爆ベストを起爆させたとされる。

〝アサド政権崩壊後、ダマスカスで発生した初の自爆テロ〟として、この事件は大きく報道された。シリア内務省は、事件の犯人がイスラム過激派ＩＳ（イスラム国）の一員だと発表したものの、スンナ派過激派組織が犯行声明を出しており、現在まで情報が錯綜（さくそう）したままだ。だが、シリアにおける最大宗派イスラム教スンナ派の影響力のもと、キリスト教徒などの宗教的少数派の安全が脅かされていることを、事件は示していた。

2025年6月、自爆テロで多くの死傷者を出したダマスカスの聖エリアス教会。事件翌日に撮影

事件の翌朝、シリア情報省からジャーナリストビザを取得したばかりの私は、その足で現場に向かった。教会の周囲には規制線がはられ、（イスラム教スンナ派の兵士たちが多数を占める）暫定政権の治安部隊がものものしく警備にあたっている。発生から一夜が明けたというのに、教会内部からはまだ煙が上がり、遺族や警備関係者、教会関係者など、一部の者しか内部に立ち入ることが許されていない。教会を囲むフェンスの辺りにまでガラス片や木片が飛び散っており、爆破の衝撃の大きさがうかがわれた。

規制線の外側では、地元住民が不安そうに話し込んでいる。私はその何人かに話を聞いた。近所に三五年暮らしているというイスラム教徒の女性ハナンは、「本当に許し難いこと」と怒りを露わにした。この地区では、キリスト教徒とイスラム教徒が交じって暮らしてきた。「宗教は違えど私たちはシリア人。私たちはひとつ

この続きは本誌でどうぞ！